Japanese Journal of Applied Psychology
2008, Vol. 33, No. 2, 59-72

総　説

「血液型気質相関説」の史的評論 II

—目黒宏次・澄子と能見正比古の構想を中心にして—

大村政男*・浮谷秀一**・藤田主一***

A Historical Criticism to the Blood-Temperament Correlation Theory II

—An Ideas of Kohji MEGURO, Sumiko MEGURO and Masahiko NOMI—

Masao OHMURA*, Shuuiti UKIYA**, and Shuichi FUJITA***

In this thesis, some problems involved in the Blood-Temperament Correlation Studies are discussed.

(1) Comprehensive definition of science is yet to come, however, it is obvious that the nature of science is not idiographic but nomothetic. Many researchers devoted themselves seeking the nomothetic conclusions through the researches utilizing their own experimental samples. In the old days, data collected are analyzed with rough estimate at their own guess and treated them with the descriptive statistics, then inferential statistics comes in. Theory of inferential statistics is originally developed quantitatively for the experimental treatment of agricultural farm products. Application of this statistics is continued not only in the area of basic medicine but also in the domain of psychology. It became inevitable discipline to use this methodology for publishing the articles in the scientific psychological journals. Who can convince us the data treatment based on inferential statistics is the only feasible means of interpreting the data collected? Numeric plays interesting rolls, increment of average grand temperature three degree is said to cause the great changes of earth surface, but deviation of same number, three points of sigma scores of standardized achievement test does not mean much significance. Numeric may mean different in the each area according to the nature of researches. Inferential statistics must be handled carefully with this point of view.

(2) The researches pertaining correlation between blood type and temperament・character call the attention of many public audience. They are introduced in many popular none academic magazines, most of these articles are written by layman, not by psychologists. These articles or studies are simply imitation of those done by Takeji Furukawa. Some of authors along this line keep publishing the similar articles based on their mere imagination. Recently, G. Davis Institute disclosed that taking the blood type of parents into consideration, relation between character and 24 blood types, secondary blood type, indices of blood type DNA integrated. No evaluation nor comments are mentioned by psychologists on this issues, but psychologist must call the attention of public that these are nothing more than absurd amusement.

(3) Why many people tend to believe character judgment based on blood type? We propose F・B・I Effect Hypothesis, namely F (free size), B (brand) and I (imprinting). Traits such as self-sacrificing, sensitive, patient and etc., may describe the character of certain person to some extent depending on the situation, F (free size). If similar character describing traits are bundled together and name it, for example O type, B i,e (brand), these similar characters becomes inherent

* 日本大学　Nihon University
** 東京富士大学　Tokyo Fuji University
*** 日本体育大学　Nippon Sport Science University

characteristics of Type O. When these characteristics are feasible, processes of imprinting occur as Kiz Lorenz pointed out, and gradually settles in the people's mind. Those who believe character judgment by the means of blood type may have fallen into this fallacy. However, correlation between physical constitution and temperament character is obvious, psychologist, how brilliant they may be, will never be able to get through skin into the body. Researches in the field of cerebral physiology must be responsible to clarify the relation between blood type and temperament・character.

key words: blood type, Kohji Meguro, Sumiko Meguro, Masahiko Nomi

1. 古川竹二の人間像

1994年7月，北海道医療大学で開催された日本性格心理学会（現：日本パーソナリティ心理学会）の第3回大会で，福島大学の佐藤達哉（現：立命館大学）と北海道医療大学の渡邊芳之（現：帯広畜産大学）の2人が「血液型気質相関説の創始者・古川竹二の生育歴と業績―日本における性格心理学の歴史を考える(3)―」を発表している。かれらは論文の末尾で，古川は一般に温厚な人物と伝えられているが，かなりの攻撃性を秘めた人物であり，ある意味では皮肉屋でもあったと述べている。古川は「血液型によって生来の気質が把握できる」といういわゆる「血液型気質相関説」を唱えて以来，学界や世間から厳しい反論や無稽の罵声を浴びることになる。このような四囲の状況が温厚なA型気質の古川に攻撃的な性格のヴェールを打ち掛けたのかもしれない。古川の友人松尾長造（二松学舎大学）は，『心理学研究』（15巻2輯，1939）で「六分どおり怒ることはあっても十二分に憤慨することのできない，発揚的興奮には縁遠い人である」と述べている。なお，佐藤と渡辺は，1995年7月，同学会の第4回大会（於：中京大学）で古川竹二についての続報を行っている。内容は，古川の生育地の長崎県西彼杵郡における実地調査報告である。

2. 古川の「血液型気質相関説」の現代的考察

古川の時代は，統計法がまったく発達していない“目分量統計”の時代である。もし，現代のような統計的な技法が使用されていたらどうなるであろうか。帰無仮説を5%，あるいは1%の危険率で棄却できるものがいくつも見られるのである。ここではそのうちの4件について考察しようと思うが，これぐらいのレベルの研究は，現在の学会発表や学術誌掲載のいわゆるレフリーペーパーのなかにもしばしば見られるものなのである。

Table 1は，昭和の初期，呉海軍病院の大岩博雅軍医少佐が1930年の10月，『海軍軍医会雑誌』19巻5号に発表した「血液型ト精神型トノ関係ニ就テノ研究」の資料である。大岩は結核性疾患にA型が多いことを指摘している。カイ自乗検定によれば，$\chi_0^2=10.43, p<.05$ で帰無仮説は棄却されることになる。大岩は推計学が学界に出る以前にA型の結核性疾患に対する脆弱性を見出していたことになる。

記述統計は，収集した資料についての統計処理であるが，推測統計は収集された資料の背後に広がる母集団に関する情報処理である。もしも他日，A型と結核性疾患の関連性が数人の研究者によって否定されたならば，Table 1のカイ自乗検定は「第1種の誤謬」を犯したことになってしまう。なお，「カイチュウ博士」として著名な藤田統一郎（東京医科歯科大学名誉教授）もその著『パラサイト式血液型診断』のなかで，A型が結核性疾患に対して脆弱であることを記述している。藤田は同書のなかで，「私は，血液型によって罹患率に差があることから，人間の性格や行動が血液型によってある程度は規定されていると考えています」としている。古川学説はまだ死んでいないのかもしれない。

Table 2は，松村楯男と木下政市が1932年の2月に『東京医事新誌』276号に発表した「ルンペンの血液型に就いて」の一部である。「ルンペン」とはドイツ語のLumpenで，ホームレスのことをいう。松村と木下はB型がルンペンの特徴だとし，しかも，ルンペンにB型が多いことはすでに予測されていたと述べている。すなわち，かれらは将来の計を立てることに興味を持たないで，現在を愉快に送ることで満足するものが多いからだという。2人の研究者は念のためというつもりか，「このようにルン

Table 1　結核性疾患者の血液型の分布
（単位: 人）

	A	B	O	AB	合計
観察値	81	33	54	6	174
古川の基準による期待値	66.5	36.9	53.9	16.7	174.0

Table 2　ルンペンの血液型の分布
（単位: 人）

	A	B	O	AB	合計
観察値	356	343	249	243	1,191
古川の基準による期待値	455.0	252.5	369.2	114.3	1,191

Table 3　野球選手（正選手）の血液型の分布
（単位: 人）

	A	B	O	AB	合計
観察値	59	32	76	11	178
期待値	68.0	37.7	55.2	17.1	178.0

Table 4　予備選手の血液型の分布
（単位: 人）

	A	B	O	AB	合計
観察値	21	19	41	2	83
期待値	31.7	17.6	25.7	8.0	83.0

ペンにB型が多いというと，B型の人のうちには不愉快を抱く人があるかもしれないが，それは理由のないことである。単にB型の人がものごとに淡泊であり，執着心に欠けるという気質の例を挙げたにすぎない」とことわっている。

Table 2 では，χ_0^2 の値が 237.9 ($p<.01$) になり，帰無仮説は棄却される。ただ，B型とともにAB型の頻度も大きいが，どうしたことか，松村と木下はAB型については触れていない。古川は，AB型はB型に通じるものがあるといっているがどうだろうか[1)]。

Table 3 は，大阪血液型研究所が 1932 年 5 月に『血液型研究』通巻 9 号に発表したもので，甲子園で開催された「第 9 回全国選抜中等学校野球大会」に出場した野球選手（正選手）の血液型分布である。

Table 5　遅出し群における血液型の分布
（単位: 人）

	A	B	O	AB	合計
観察値	27	9	5	4	45
期待値	17.2	9.5	14.0	4.3	45.0

Table 6　1992 年夏における血液型分布
（単位: 人）

	A	B	O	AB	合計
観察値	290	149	204	65	708
期待値	270.5	150.1	219.4	68.0	708.0

Table 7　1993 年夏における血液型の分布
（単位: 人）

	A	B	O	AB	合計
観察値	244	161	247	69	721
期待値	275.4	152.9	223.5	69.2	721.0

この Table 3 では，χ_0^2 の値は 12.07, $p<.01$ になり，帰無仮説は棄却される。出場した正選手にO型が多いのである。さらに興味深いことは，予備選手 83 人にもO型が多いのである。次の Table 4 は，その 83 人の血液型分布であるが，χ_0^2 の値は 17.33 ($p<.01$) になっている。

古川学説では，O型は意志強固で精神力旺盛，理知的で感情に駆られないという特徴があるという。これが優れた野球選手の資質に通じるということになるのか。

Table 5 は，古川自身が提示した資料である。古川は，試験時間内に答案を早く出す人（早出し群）と，ぎりぎりまで粘る人（遅出し群）の血液型を調査している。Table 5 は，古川が 1934 年 3 月に『血液型研究』通巻 30 号に，「気質の現はれ二三」と題して発表した資料の一部である。早出し群には特徴が見出せなかったが，遅出し群ではA型が突出している。A型の持つ心配性，抑制された行動，完全主義などが，遅出し群の特徴のなかに看取されると説明されている ($\chi_0^2=11.42>11.345$)。

これで，いちおう古川学説の推計学的考察を閉じることにするが，$p<.01$ のような厳しい危険率で帰無仮説が棄却されている。現在の学会発表や学術誌はこれで結論になる。しかし，本当に母集団に関す

1) 『血液型研究』通巻 30 号，1934, p. 320.

る情報処理ができているのであろうか。はなはだ疑問である。2件の例をあげておこう。

Table 6 は，1992年夏の全国選抜高等学校野球大会に参加した選手708人の血液型分布である。

Table 6 では，Table 3 や Table 4 に見られたような観察値と期待値の大きなズレは見当たらない。χ_0^2 の値は2.62で $p<.05$ の域でさえも超えられないのである。

Table 7 は，Table 6 の1年後の場合である。ここでもO型は消えている。χ_0^2 の値は6.48で，$p<.05$ の域を超えることはできない。

しかし，危険率のレベルを低下させて，帰無仮説を強引に棄却してしまう研究者もいる。$p<.10$ というような記述がそれである。また，$p<.001$ というのは何を意味しているのか，しっかり考察すべきである。この点がしっかり理解されていないと，コンピュータの示唆のままに $p<.001$ といったような驚天動地の危険率を平然として使ってしまう。私たちは χ_0^2 や t_0 が $p<.001$ レベルであっても，あえてその危険率を使わないことにしている。増山元三郎にしたがって，$p<.05, p<.01$ でとどめることにしているのである。

野球選手のO型の件に話題をもどそう。Table 3 や Table 4 の資料で，結果が $p<.01$ で支持されたからといっても，Table 6 や Table 7 では雲散霧消してしまっている。$p<.01$ というのは，100回のサンプリングにおける処理で，帰無仮説が正しいのに誤って棄却してしまう危険率が100回中，わずか1回しかないということを意味しているのである。1932年の「O型神話」は，1992年と1993年には消えている。それでは，血液型と気質・性格，それから運動性は関連していないのかというと，速断することはまだできない。藤田統一郎の意見はすでに紹介したが，心理学者でも体質論に拘泥している人はかなり多いのである。

3. 目黒宏次・澄子の『気質と血液型』

古川学説は，1935年ごろにはすっかり水面下に没してしまった。しかし，1970年7月に目黒宏次・澄子によって『気質と血液型』という書物が私家版として刊行され，古川学説はいちおう復活を遂げることになる。最初に古川学説に興味を示したのは澄子で，宏次は引っ張られるかたちで研究が出発したようである。

目黒夫妻の出自については明らかでないことが多いが，著書の奥付には簡単に，宏次は東洋大学卒，都立大学大学院修了，現在都立高校（都立立川高校か）教諭としている。澄子については，奈良女子高等師範学校卒業，文筆業としてあるだけである。

目黒夫妻は，『気質と血液型』の「まえがき」でおおむね次のように述べている。すなわち，「私たちの血液型気質研究は，古川学説の研究からさらに人間関係学，あるいは関係的人間学という新しい学説の理論的追求に進み，今日，ようやく仮説として発表するところにまで達したのである」と。

目黒理論の構成　目黒夫妻の著述は，第1部：歴史編（古川学説の紹介と批判），第2部：理論編（関係的人間学への試み），第3部：対話編―の3部から構成されている。ここでは，各部から目黒夫妻の主張の核心ともいうべきところを記述していこうと思う。

古川学説に対する批判　古川学説の中核は，日本における一般的・常識的水準から割り出された徴表（メルクマール）としての気質タイプ（特徴）である。このような立場に拠っている古川学説では，ある血液型とある気質の関連は絶対的である。「温厚従順である」というA型，「淡泊・快活である」というB型，「自信力が強い」というO型，「外面は楽天的だが内面は心配性」というAB型ということになる[2)]。

目黒夫妻は，このような古川学説の絶対性を衝いている。血液型と気質の絶対的な関連は考えられないという。A型が温厚従順といったところで，スポーツの試合ともなると，そのようなことは曖気（おくび）にも出せないのである。Table 3 や Table 4 に示されている優秀な野球選手とO型の持つ精神力の強さとの関連においても同じことがいえよう。O型以外の血液型を持つ優秀な野球選手についてはどう説明するのであろうか。

目黒夫妻は，古川竹二は気の毒だといっている。なぜなら，古川学説においては，血液型と気質との関連づけが気質調査表（自省表）と血液型の判定が

2) このカッコ内のことばは私たちが補充したものである。これが入っていないと文脈がおかしくなってしまう。

次ノモノヲ読ンデ全体トシテ自分ニ一番当ツテ居ルト思フ組ニ（○）ヲツケヨ。

注意

（一）若シソノ他ノ組ニモ特ニ当ツテ居ル事項ガアツタラ、ソノ事項ノ上ニ○ヲツケヨ。

（二）自分ノ組ノウチニ特ニ当ツテ居ナイ事項ガアツタラ、ソノ上ニ×ヲツケヨ。

Gr. B	Gr. A	Gr. O
(　)	(　)	(　)
アッサリシテ居ル方 気軽ナ方 物事ヲ長クハ気ニシナイ方 快活ニシテヨク談ズル方 活動的ナ方 刺戟ガ来ルト直グニ之ニ反応スル方（敏感）	内気ナ方 オトナシイ方 用心深イ方 取越苦労ヲスル方 反省的ナ方 深ク感動スル方	意志ガ強イ方（ハウト読ム） 落付イテル方 精神力ガ強イ方 キカヌ気ノ方 感情ニ駆ラレナイ方 オトナシ相デモ自信ガ強イ方

Figure 1　古川が 1929 年に使用した自省表
(注): Gr はドイツ語で群や類属を表す Gruppe の略である。

当たるか，当たらないかという結論に終始してしまったからである。しかも，このような論議のために古川学説が崩壊し，戦後の血液型–気質研究に 30 年の空白がもたらされたとしている。将来，調査表をさらに綿密に研究していけば 100% 的中するようになると思うが，私たち（目黒夫妻のこと）は真理追求のため，この問題を一時保留したいと思う。そして，新しい角度から血液型問題を考察するとしている。「関係的人間学」の誕生である。なお，目黒夫妻は，血液型（と気質との関係）を調べるのに調査表を用いるべきではなく，血液型そのものを検査すべきである。血液型を検査して，A 型，B 型……を判定し，それから A 型はこう，B 型はこう……というふうに観察帰納すればいいのではないか—としている。すごい発想であるが，1939 年ごろ古川竹二も似たようなことをしている。

上の Figure 1 は，古川が 1929 年に使用していた自省表であるが，気質に関する項目の上にそれぞれ血液型の名称が記載されている。「意志ガ強イ方」,「落付イテル方」などは Gr. O（O 型）に属する項目となる。これでは「O 型の人は……という気質だから，ここに○印を付けよ」ということを示唆することになる。しかも，古川は，自分と同じ調査をする人はこの「自省表」を使ってほしいと書いている。このところ，古川と目黒夫妻は同工異曲というべきであろうか。

目黒夫妻は，古川が構築した「血液型気質相関説」に敬意をはらいながら，その絶対性（注: Figure 1 に掲げたような血液型と気質の結びつき）に大きな変革を与えたといえる[3]。ただ目黒夫妻の葛藤も面白く表れている。その一部を要約して掲載しよう。

O 型の人は自信が強いといっても，A 型の人には A 型の自信が，B 型の人にも，AB 型の人にもそれぞれの自信が認められる。それにもかかわらず，私たちは古川学説に根本的に反対するものではない。それぞれの血液型にはそれぞれの自信力がある。それらを認めたうえで，なおかつ O 型の自信力の強さは常識的に顕著であると信じるのである。

目黒夫妻は，A 型の神経質についても苦言を呈している。すなわち，神経質とは何か—といっても，きわめて曖昧である。そこで，古川学説による気質測定は，当たるも八卦，当たらぬも八卦ということになってしまうのである。A 型の神経質と同様に，B 型の神経質，O 型の神経質，AB 型の神経質というものも存在するのであるという。自信力にせよ，神経質にせよ，血液型間に有意な差異が看取できるのであろうか。

最後に，目黒夫妻の所説の核心になっている「関係的人間学」なるものについて解説しておこう。

目黒夫妻（宏次・澄子）の関係的人間学　目黒夫妻は，ディズニー映画の『砂漠は生きている』における動物の生き方がヒントになって，ABO 4 型における相互関係に気づいたという。この映画では，生物の強弱と摂食行動の力関係が描かれているが，目黒は人間相互間にもそのような力関係があること

[3] このカッコ内のことばは私たちが補充したものである。これが入っていないと文脈がおかしくなってしまう。

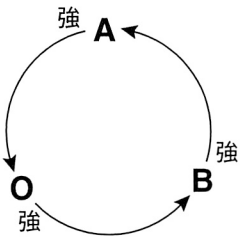

Figure 2　目黒夫妻の循環論（その 1）
（注）『気質と血液型』p. 121

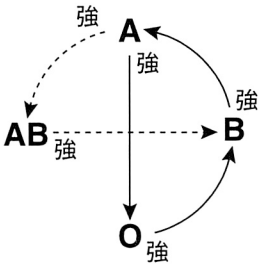

Figure 3　目黒夫妻の循環論（その 2）
（注）　前掲書 p. 171

に注目している。この力関係は，生物学的な人間関係で，生物の世界に見られる弱肉強食の原理に比較することができる―と記述している。

社会的な力関係のほかに，血液型間にこのような力関係が存在するのか，大きな疑問である。さらに，他者認知に際して，そのような血液型的力関係がはたらくのであろうか。これも大きな疑問である。それはさておき，かれらの描いたソシオグラム（注：ブラッドグラムとも呼ぶべきか）を記述してみよう（注：前掲書 p. 109）。

A 型と O 型と B 型の間には一つの循環関係があって，絶対の優越者はないということである。こうして，私共の関係的人間学は，血液型の ABO 式を基準として，生物その他の科学の理論を採用して，古川説（注：血液型気質相関説）を克服したと思っているのである。勿論，科学的に証明するまでには至っていないけれども，心理学的に，仮説として土台はできあがったと確信しているのである（原文のまま）。

目黒夫妻は，具体的にその様相を次のように記述している。

A 型は O 型に対し，強者として立ち，O 型は B 型に対し強者として，B 型は A 型に対して強者として立つということである。更に興味あることは，この生物学的な強弱関係は，循環論となって，もとにもどるということである（注：原文のまま，Figure 2 参照）。ここには AB 型は現われていない。目黒夫妻は，「次の場合は今の所，説明がつかない」として「AB 型と A 型の場合，A 型は AB 型に対して生物学的に強者の関係にあるようだ。これは原則 B 型対 A 型の関係に反する。同様に，AB 型と B 型の場合，AB 型は B 型に対して生物学的に強者の関係にある。これも亦 A 型対 B の原則に反する」として，第 2 部の理論編「関係的人間学への試み」を閉じている。Figure 3 は，Figure 2 に AB 型を加えた場合の関係図である。

目黒夫妻の『気質と血液型』の第 3 部は「対話編」になっている。その一部に「文責 S」となっている一文がある。この S という人物は，目黒宏次の都立立川高校の教諭時代の教え子で，のちに血液型と気質に関する多数の書籍を自社（産心社）から刊行していく鈴木芳正である。この S のことばとして，次のような文章が載せられている。

「古川氏の研究の場合は，血液型ごとに長所・短所というものを挙げ，最初から気質に価値判断を加えてしまっているけれども，私はそれには反対です。（中略）それから，強弱関係は優劣関係ではないということも特筆大書しておく必要があります（注：前掲書 p. 226）。」

目黒夫妻の『気質と血液型』は，古川の学説の絶対的基準に疑問を持ったところから出発している。しかし，目黒夫妻の著述は数量的データを一切伴わない主観的な記述なのである

(1)　古川学説では各血液型に対応する気質に絶対的基準を置いたが，目黒学説では各気質間の相対的関係を追究する。

(2)　気質は絶対的なものと同時に流動的なものである。血液型気質は流動的なものであって，型と型との関係によって変化するのではないかと考えている。

(3)　古川学説を無条件に承認することはできないが，将来必ず古川学説は完成されるものと信じている。完成された古川学説はどのようなかたちをとるか―というと，外界の事物に対する各血液型者の視覚・聴覚・触覚などの反応（注：受容器の性能のこと）の測定や感情の測定などによる科学的データ

によって，純粋な絶対的基準が得られるのではないかと考えている。なぜ，血液型という組成の差異によって異なる基準が得られるのかという生理学上の学理が究明されなければならない。

目黒夫妻の構想は可笑しい。古川のように絶対的なスタンスをとらないと，Figure 2 のような関係図は成立しないのである[4]。さらに，目黒夫妻はそれまでだれもが研究していなかった血液型間の強弱関係を主張している。しかも，血液型の型間の強弱の関係は，年齢，性別，国籍を問わない。一切を貫徹する自然法則である（注:『気質と血液型』p. 122）としている。この強弱関係は優劣関係のようなものではなく，非常に客観的な関係だという。目黒夫妻は，ディズニー映画『砂漠に生きている』に刷り込まれてしまったのである。目黒夫妻の「客観性」のベースはそこにある。『血液型人間学—運命との対話』の著者前川輝光[5]は，その著書のなかで，筆者には目黒の「強弱関係」がどのような意味で「客観的」といわれているのかわからない—と書いているが，ベースは「刷り込み」なのである。

目黒夫妻の著書は私家版だったせいもあって，ほとんど普及しなかったが，この本はさらに悲劇的な運命をたどることになる。『気質と血液型』の発刊（1970 年）の 1 年後に，能見正比古の『血液型でわかる相性—伸ばす相手，こわす相手』が青春出版社から新書版で刊行されたからである。

ここで章を能見正比古に移すべきであるが，もう 1 人の人物，すでに名前が出ている鈴木芳正についての評論を記述しなければならない。

4. 鈴木芳正の「血液型ソシオグラム」

鈴木芳正が都立立川高校時代に目黒宏次の教室にいたことはすでに記述してあるが，ここでは若干補填しておこう。

1940 年，東京小笠原村出身，都立立川高校卒業，青山学院大学英米文学科中退，現代心理学研究会（会長：目黒宏次）に所属し，「気質と血液型」の研究に従事する。大沢商会，トヨタ自動車販売会社を経て，日本大学経済学部の田崎 仁（まさし）教授の産業心理研究所に勤務していた。日本応用心理学会の名簿（2007 年）によれば，産業心理研究所が所属機関になっている。

鈴木は，すでに触れているように目黒夫妻の『気質と血液型』の第 3 部：対話編に S という匿名で登場している。この活躍は能見正比古よりも活字上やや早期の出発になる。

鈴木は「BN 法」と略称される多次元の心理検査を開発している。この「BN 法」は “Blood Nature Method”[6] の略で，知能・性格・職業興味・精神健康・性度の 5 領域についての測定である。この検査の信頼性や妥当性については明らかではないが，このような心理検査で血液型別に有意差を見出すのは困難である。なお，どういう経緯かわからないが，1993 年 6 月に中華人民共和国の北京で発刊された『血型・星座・命運』4 冊分[7]のうち，『血型 B』と『血型 O』の 2 冊には付録として，「鈴木 BN 法」が紹介されている。中国では血液型ではなく血型という。

鈴木芳正は，能見正比古や前川輝光からさまざま批判を受けてはいるが，クリエイティヴな面白さがある。

鈴木は，1979 年に『血液型でわかる人物史』を刊行している。彼は，そのなかで 4 種のソシオグラム（注：ブラッドモデル）を描いている。鈴木はこれらの図式に血液型 4 型を含めようとしたらしいが，載っているのは 3 型だけである。Figure 4 にあるうち，(1) と (3) は目黒夫妻からの引用で，他の 2 型は鈴木の創作である。

(1) の A·B·O は三すくみの関係である。矢印の方向が選択を示している。A 型は何か必要になったときは O 型を組みしやすしと見て選択する。B 型を選択することはない。

(2) の A·O·AB 型は，三すくみの関係ではない。O 型は A 型と AB 型の両方から選択されている。心理的な主導権はいつも A 型にあると考えられる。

---

4) 古川は気質の不変性を固執してはいるが，ある血液型にはさまざまな（他の血液型とは明らかに異なった）気質があることは認めている。『血液型と気質』p. 322–323 参照。

5) この本は 1998 年，京都の松籟社から刊行されている。前川は当時，亜細亜大学国際関係学部の助教授。博士（文学：東京大学）。専攻：インド宗教・文化論，比較文化論，宗教学。

6) 鈴木は「BN 法」に適切な日本語名を与えていない。

7) この 4 分冊は，北京の華語教学出版社刊で，曲音という人の編集になっている。

(3) の A・B・AB 型は，三すくみの関係である。(1) のパターンと同じである。A 型は何か必要になったとき，AB 型を組みしやすしと見て選択する。B 型を選択することはない。

(4) の O・B・AB 型は，三すくみの関係ではない。(2) のパターンと同じである。心理的な主導権はいつも AB 型にあると考えられる。

このようなソシオグラム（注：ブラッドモデル）はデータを伴わない，研究者のまったく主観的な配列なのである。しかし，能見正比古の『血液型でわかる相性』(1971 年) に先立っての発想は高く評価されてもいいと思う。

なお，血液型と気質の相関を研究する人たちのなかには，歴史的人物の血液型を推定する人が見られる。投票によるものと，研究者間の推定によるものとがあるが，鈴木は後者の立場をとっている。彼は，西郷隆盛は A 型だとしている。古川竹二は隆盛の崇拝家で，彼の言行録から A 型に違いないとまとめている[8]。しかし，隆盛の没後に遺髪によって検査したところ B 型であった。ちなみに，大久保利通は O 型であることが確定している。西郷隆盛 *vs* 大久保利通の対立も B 型＜O 型で理解されるかもしれない。司馬遼太郎は随筆「大久保利通」のなかで，隆盛は情義の人，利通は主知の人としているが，もちろん血液型には言及していない。„Körperbau und Charakter“ 的にいえば，西郷は肥満型で循環気質，大久保は細長型で乖離性気質といえるかもしれない[9]。

5. 能見正比古の「血液型人間学」

能見正比古は，1925 年 7 月 18 日に旧満洲国の奉天（現在の中華人民共和国の瀋陽）に生まれている。彼がいつ血液型と気質・性格の領域に没入したかは明らかでない。目黒夫妻や鈴木芳正たちとの「先陣争い」のこともあって，適当に粉飾されているのかもしれない。いちおう能見の記述にしたがって紹介しておこう。

(1)　正比古は中学に入学（1938 年）して間もないころ，1 歳半年長の姉の幽香里から血液型のことを聞いたそうである。

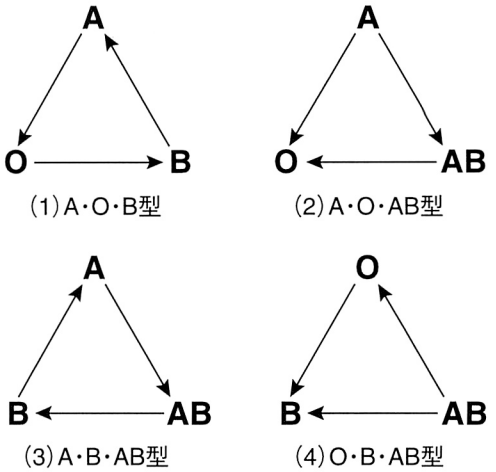

Figure 4　目黒–鈴木の血液型気質モデル

(2)　この姉は血液型について詳しく，大相撲見物をしたときも力士の取組みを血液型的に解説したという。この話，実話であろうか？

(3)　幽香里は「血液型と気質」についての知識をどこから得たのであろうか。彼女は東京女子高等師範学校（東京女高師）の理科（数学専科）に在学していた（1942～45 年？）。古川はすでに没していたけれども，キャンパスに余韻が残っていたのかもしれない。あるいは，幽香里が古川の『血液型と気質』(1932 年) を読んでいたのかもしれない。この姉は，1945 年 3 月 9 日から 10 日にかけてのアメリカ空軍の東京大空襲のおり，女子寮の 2 階から転落，それがもとになってカリエスを併発（この点不明），自殺してしまう（年月日不明）。

(4)　正比古が東大工学部に入学したのが 1945 年の初頭か。彼は文系的な人だったが，兵役を回避するために理系を選択する。東大の学生寮（定員 360 人，実際 450 人）にいたおりに，学生の日常行動と血液型の関連に気づいたという。

(5)　師匠の大宅壮一から，これ（注：血液型）をやると儲かるぞといわれて着手した（わが国の著名な性格心理学者が能見から直接聴いた話である）。

これら 5 項目のうち，最初の 3 項目は，すべて正比古の姉の幽香里に関するものである。この女性が自殺してしまったので，データは謎に包まれている。(4) も謎である。能見の陳述で信頼できるのは

[8] 古川竹二「偶感」，『血液型研究』通巻 13 号，1932.

[9] 2008 年 1 月 19 日付の『毎日新聞』(夕刊) には，東北大学の辻　一郎（公衆衛生学）や柿崎真沙子（心理疫学）たちによる「体格と性格」に関する調査の一部が掲載されている。その論文は『国際心身医学会誌』に発表されているとのことである。

(5) の大宅壮一の薦めだけである。その薦めはいつあったのであろうか。それはまったくわからないが，実現したのは 1971 年 9 月である。能見正比古の『血液型でわかる相性―伸ばす相手，こわす相手』が青春出版社から出版されたからである。わが国の大衆文化のなかに血液型が根づいたのは能見の筆力とマスコミの力に負うところが大である。また，心理学者の大多数が血液型を嫌うのは，能見とマスコミによって培われた通俗性のためである。

血液型でわかる相性　古川は『血液型と気質』のなかでは相性という心理には触れていないが，彼が深く関連していた大阪血液型研究所の『血液型研究』通巻 3 号（1931 年 12 月）には，長尾美知が「血液型と結婚問題」と題する随想を寄せている。この雑誌の通巻 13 号（1932 年 10 月）には，渡邊道義が「気の合った友人と本人との血液型の関係に就て」という論文を寄せている。この研究は「気ノ合ッタ友人」を調査票によって指名するものである。同じ血液型の人を気の合った友人として選んだ比率は，師範学校生 48 人においては 16 人 (33.3%)，中学生 347 人では 138 人 (39.8%) である。そこで，血液型によらない気の合った友人の選択は，師範学校生では 48 人中 32 人 (66.7%)，中学生では 347 人中 209 人 (60.2%) になる。

『血液型研究』の通巻 17 号（1933 年 2 月）には，長瀬誠の「渡邊氏の『気の合った友人と本人の血液型』を読みて行へる余の追試成績」が掲載されている。そこでは，高等女学校[10]の生徒 393 人が調査の対象になっている。393 人中，同じ血液型の友人を気が合う友として選択した人は 133 人 (33.8%)，そこで血液型によらない選択は，393 人中 260 人 (66.2%) ということになる。

渡邊も長瀬も血液型と相性の関連を否定しようと思って調査したわけではない。積極的な関連を期待していたのである。そこで，渡邊も長瀬も調査法に欠陥があった―と述懐している。「気が合う」という表現が曖昧なのである。

いま，この 4 章では能見正比古の構想を紹介し批判しようとしている。そこに，なぜ，古川時代のデータを持ち出しているのか，その理由を説明しなければならない。その理由は，能見が力説するところの「血液型と相性」はデータなしの空論だからである。

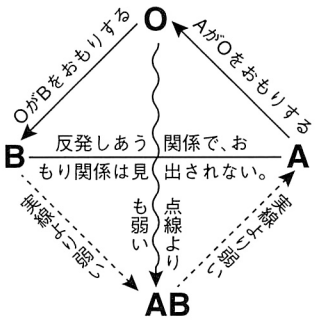

Figure 5　能見正比古が描いた血液型人間関係図

能見は『血液型でわかる相性』のなかで，「同 1 人の同じ気質表現も見る人によって違ってくる。（中略）性格（または気質）は環境により，また相手によって異なった表現をとる。また，同じ性格表現を，異なった性格の人は，異なったものとして受けとる。これを“性格（気質）の相対性原理”と，私は呼ぶ。したがって，人の性格を観察するときは，めいめいが気質に応じて持っている“性格測定用目鏡（めがね）”の偏差（ずれ）を，できるだけ補正するように心がけなければならないわけである」としている。

目黒夫妻，鈴木芳正，それから能見正比古も，各血液型に絶対的な（固定的な）気質を認めていない。人間関係によって，それは流動していくという。かれらは，それでいながら血液型をベースにした血液型人間関係図を描いているのである。上に掲げた Figure 5 は，能見正比古が彼の多くの著書に掲載している人間相関図である。

能見は Figure 5 について，次のように解説している（要約）。

A 型は O 型のおもりをする。「おもり」というのは，相手の感情や情動を受容し慰め励ますことである。これは損にならないと能見はいっている。いつのまにか O 型を自分（A 型）の望む方向に操作できる利点があるという。次に，O 型は B 型のおもりをする。それから，B 型は AB 型のおもりをする。しかし，この線は点線で描かれているように弱い関係である。次は AB 型が A 型のおもりをするところであるが，これも点線で描かれているように弱い。これで A・B・O・AB の 4 型は一巡することになる

[10] 戦前は小学校 6 年までが義務教育。その後，男子には中学校，女子には高等女学校への進学の道が開かれている。

が，A 型と B 型は反発関係で，おもり関係は見出せない。また，O 型は AB 型のおもりに当たることになるが，点線よりも弱い関係だという。能見はここで重要なことわり書きをしている。それは，おもりされる側がする側をリードするようになってしまうからである（注：これは十分起こりうることであろう）。そこで，能見は「おもり関係」を「リード＝おもり関係」と修正している。すなわち，A 型と O 型の「おもり関係」は「リード＝おもり関係」と改められることになる。能見は，古川の血液型気質相関説と目黒夫妻の関係的人間学（注：目黒-鈴木の血液型気質モデルを含む）をベースにして，血液型人間学なるものを構築していったのである。なお，目黒夫妻（目黒夫妻-鈴木芳正）も能見正比古も思弁的にものごとを展開させているのが特徴である。作家の大西赤人は，その著『血液型の迷路』（朝日新聞社，1986 年）のなかで「この理論（注：能見正比古の「血液型人間学」のこと）自体が，猫の額ほどの土地を土台にした滅茶苦茶に頭デッカチな高層建築のように思われてくる」と述べている (p. 184)。

模倣と想像の血液型人間学　能見正比古の血液型人間学は，古川竹二の血液型気質相関説のスマートな模倣である。このことは，日本応用心理学会の年次大会でたびたび指摘してきたことである。さらに付加すれば，目黒夫妻の関係的人間学も呑み込まれているといっても決して過言ではないと思う。ここでは能見正比古の非科学性を指摘しておこう。

(1)　次の Table 8 は，血液型 A 型の気質的特性における古川と能見の対比である。古川が，温厚従順，慎重，細心，謙虚……などと記述すると，能見は，穏やか，八方美人，まじめ，慎重……と変換する。これでは国語辞典的な敷衍である。しかも古川と違って，能見の Table 8 のデータには数量的な裏付けがまったく見当たらない。B 型や O 型についても，この Table 8 と同じ手法である[11]。

(2)　古川は，AB 型の気質は外面は B 型で内省（内面）は A 型であるとしたが，能見はここでも数量的な裏付けのない AB 型気質を捻出してしまう。AB 型についての項目は次のようなものである。

合理性に富む考え方，批判・分析を好む，社会参加と社会への貢献を望む，人間関係の調整がたくみ，社会での人との調和を望む，重要問題で他人の意見を求める，社会では感情を抑制する，仲間うちでは激情家，対人関係では距離をおく，人の裏表や偽善をにくむ，集中力が高く持続性は少ない，考え方や解釈が多角的，メルヘン的空想趣味がある，物事に対して趣味的で没頭しない，経済能力，生活力がある，計算高い，生活には最小限の安定を望む，闘争をさける。

Table 8　A 型の気質的特性における古川と能美の対比

古川竹二	能見正比古
温厚従順	穏やか　八方美人　まじめ
慎重　細心	慎重　責任感　人をよく見る
謙虚	礼儀正しい　自分に厳しい
反省的	節度　常に自己改善　筋を通す
感動的	繊細
同情心	思いやり
犠牲心	骨惜しみしない　犠牲的精神
自分をまげやすい	思い切りがよい
融和的	常識性　中庸
心配性	細部にこだわる　焦り易い
感情に動かされる	疑い深い
意志強固ではない	受動的　飽きっぽい
決断力に乏しい	自信がない
恥ずかしがりや	小心
孤独で非社交的	秘密主義　心が狭い
内気で悲観的	不平や愚痴が多い　頑固
	傲慢　執念深い　独善

（注：Table 8 における文体と異なっているが，ともに能見の記述である。）

これら AB 型に関する特徴はどこから出てきたのであろうか。能見の A 型・B 型・O 型は古川の国語辞典的な敷衍であったが，AB 型についてはデータもなにもない想像の産物である。能見正比古の遺業を継いだ養嗣子の能見俊賢 (1948-2006) は，しばしば数十万のデータを持っているというが，それはどこにも発表されていないのである。

安易な思考の展開　能見正比古は，血液型で決めつけないというスタンスを執っていながら，O 型の人身事故頻発に対する警戒を主張したり（『新・血液型人間学』p. 266*f*），犯罪者用血液型人間学の必要性を主唱したり（前掲書 p. 275*f*），おどろくばかりである。

能見は，これらの構想を展開するのに推計学的方法を使っている。彼は「カイ 2 乗検定という計算がよく使われる。ややこしいことを覚えていただく必

[11] 大村政男『血液型と性格』（福村出版，1990）p. 211-213 参照。

要はないが，この計算では危険率というパーセンテージをはじき出す」(注:『血液型エッセンス』角川文庫，1984年，p. 21) と書いている。このようなセンスで推計学を使用されたらたまらない。しかし，無知の人が推計学を利用するとどうしてもこうなってしまう。

能見は，さらに「心理学は，部分的には自然科学的な実験方法を採用しているが中心思想は科学ではない。極端にいえば心理学者の数だけ心理学が存在する。もし物理学が甲氏の物理学と乙氏の物理学とが違っていたら，科学の名に値しなくなる。心理学はまだ万人共通の客観性を持たぬ主観の学なのだ(注:『新・血液型人間学』p. 117) としている。多くの心理学者はどう反論するだろうか。

ルーツの否定 能見正比古の血液型人間学は，多くの問題を内蔵していながら大衆に持てはやされている。しかし，能見俊賢の代になって機関誌『abo mate』[12] も休刊になってしまった。あの能見正比古劇場は，彼の死とともに終演したのである。しかし，まだ能見がかけた催眠状態から覚醒しない人たちもかなりいるようである[12]。

能見正比古は，その初期において古川竹二の存在を認め，彼の著書『血液型と気質』を「ABO の会」の会員にも紹介していたが，漸次，古川が“もう居ては困る人”になってきたのである。能見は「古川氏の開拓者的功績は，私は誰よりも高く買っているつもりだが，その研究調査法については欠陥がなしとしない」(注:『新・血液型人間学』p. 109*f*) と殉教者の欠陥を叩いている。しかし，それはルーツの否定にほかならないのである。しかも，能見俊賢の時代になると古川は消えてしまう。彼は作家の大西赤人の質問に，「(前略) まとまった形で始めたのは世界的に見ても私の親父が初めてです……」(大西赤人『血液型の迷路』p. 105) と傲慢に応えているのである。

「血液型と性格」についての知識はあっても，古川竹二を知っている人は皆無といってもよい。しかし，『小さな悪魔の背中の窪み』(新潮社，1994年) の著者である動物行動学者の竹内久美子は，その著述のなかで大要次のように述べている。

たしかに，世間に氾濫する血液型性格学とか血液型相性学などという本にはいいかげんなものが多い。サンプルの選び方やデータの解釈に問題がある。心理学者が批判するのもその点なのだが，その批判の仕方があまりにも感情的で大人気ないのが気にかかる。もしも心理学者のだれかが，両者の間になにか関係があると思っているような素振りを見せたら即刻学界から永久追放されかねない。これは考えすぎかもしれない。医学の領域で，現在病気と血液型の相関がさかんに議論されているのに，心理学者の意固地さはどうしたことだろう。なにか重大な事情でも隠されているのだろうか (注: 竹内のこの一言は非常に気にかかるところである)。

竹内は，さらに次のように続けている。現在の血液型ブームの火付け役になったのは，よく知られている能見正比古というジャーナリズム出身の人物である。彼は1981年に亡くなったが息子の俊賢が継ぎ父親同様，相当数の本を出している。また俊賢父子の本に“擬態”する本も多数出版されている。ブームは最近では少し下火になったというが，ブームと感じさせないくらい定着してしまったためと思う (注: 次の一節は原文のままである)。「能見氏はこうして独自の“血液型人間学”を構築するに至ったそうである。しかし氏はあまり関係をはっきりさせていないものの，その論の基本的な部分を昭和初期の心理学者古川竹二のものなど (注: 能見は目黒宏次・澄子の『気質と血液型』現代心理研究会，1970年刊も摂取している) に準拠させていることに間違いない。」

竹内のほかにもルーツに触れた学者がいる。寄生虫学・感染免疫学の藤田統一郎である[13]。彼は『パラサイト式血液型判断』(新潮選書，2006年) のなかで，ルーツについて次のように述べている。

古川竹二，古畑種基 (当時: 金沢医科大学)，浅田一(はじめ) (当時: 長崎医科大学) の3人によって最初の血液型ブームが引き起こされた。古川学説は有識者間にも広まり庶民の話題にもなった。軍隊でもさかんに使用されたが，漸次学説の矛盾撞着が指摘される

[12] 能見正比古が全国的に組織した「ABO の会」の会員は，休刊時ごろには302人になっている。『血液型人間学—運命との対話』(松籟社，1998年) の著者前川輝光は能見俊賢を軽視していたが，正比古には絶大な敬意をはらっている。

[13] 藤田統一郎は1933年，中国の北西部 (旧満洲国と呼ばれた地域) で生まれた。現在，東京医科歯科大学名誉教授。「カイチュウ博士」として有名な人。

ようになり，古畑も古川学説に批判的になってしまった。そしてとうとう血液型と性格に関する研究も，血液型と病気に関する研究もできなくなってしまった（注：藤田は能見正比古によって古川学説が可笑しな復活をしたことにはまったく触れていない）。

藤田統一郎は，基本的には能見正比古・俊賢の構想に賛成してはいるが，それは「性格はある程度，血液型で規定される」という考え方を接点としているだけで，実態はまったく異なっているのである。藤田は，ある血液型は病気に強い，そこで健康，寿命も長い，それゆえ性格的にも強化されるというスタンスをとっている。竹内久美子もこれと同じである。

結論的にいえば，能見は古川を模倣しながらそのルーツを消し（古川が存在していたのではつごうが悪いのだ），竹内と藤田は古川や能見と接点を持っていながら独自の「血液型と性格」を展開させている—とまとめることができよう。

6. 血液型ステレオタイプと FBI 効果

詫摩武俊（当時：東京都立大学）と松井　豊（当時：東横学園女子短期大学）は，血液型によって性格が異なるという信念を「血液型ステレオタイプ」と名づけてい（1985 年）。かれらは，「東京都立大学人文学部『人文学報』第 172 号（1985 年）に「血液型ステレオタイプについて」という論文を掲載している。詫摩と松井はその論文のなかで，「血液型によって性格がかなり（あるいは非常に）異なっている」という信念を持っている人が男子 347 人中に 138 人 (39.8%)，女子 265 人中に 155 人 (58.5%) も存在していることを見出している。しかし，かれらの性格と能見正比古によって記述された性格像とは必ずしも一致をみていないのである。それでは，血液型ステレオタイプを持つ人はどんな性格なのか。詫摩や松井は，かれらの多くが躁うつ性格者で，追従傾向が目立っているとまとめている。

1995 年 9 月，共立女子大学における「日本応用心理学会第 62 回大会で，「血液型性格学は信頼できるか：第 12 報」の [I] として「高校生の血液型性格判断における FBI 効果」が，その [II] として「大学生の血液型性格判断における FBI 効果」が，浮谷と大村によって発表されている。「FBI 効果」の F は Free size の F, B は Label の 3 番目の文字の B, I は K. Z. ロレンツの水鳥の雛の実験でよく知られている Imprinting の I である。のちに藤田主一が加わったころには，Label の B は Brand の B に改訂されている。それでは，FBI 効果とは何か。解説しておこう。

Free size 効果：能見正比古・俊賢の 2 人は，ABO の 4 型の血液型のそれぞれに性格を表す項目を記述している。例えば，B 型でいえば，「マイペースな行動」，「しばられ，抑制されるのを特に嫌う」，「涙もろい人情味がある」，「仲間はずれを気にする」，「ロマンチックさはあるが表現は照れる」などである。このようなことは B 型特有の個性ではない。だれにでも程度の差を持って共通しているものなのである。ちょうどフリーサイズの T シャツのように，たいていの人に合ってしまうことになる。

Brand 効果：商標効果である。だれにでも適合する項目を多数収集して束ね，それに A 型とか O 型とかいうブランド（ラベル）を付ける。そうすると，フリーサイズの項目に B 型とか AB 型とかいう固有のニュアンスが生まれてくるのである。そこで，ブランド（ラベル）を替えるとすぐ別の血液型に変容してしまう。

Imprinting 効果：ある年齢のときにインプットされた情報は，なかなか消去していかない。反対情報が伝えられても，インプットされた情報はますます強固なものになってしまう傾向がある。

この FBI 効果は，次のような実験で明らかにすることができる。能見が記述した ABO 4 型の血液型性格に，偽のブランドを付ける。Table 9 は，偽の血液型性格に対する 589 人の男女大学生の回答状況を示したものである。589 人中，353 人 (59.9%) は，血液型記号，すなわち，FBI 効果の影響を受けた人びとである（Table 9 の中に*印を付す）。

なお，FBI 効果に惑わされないで自分の血液型性格を選択した人たちもいる。A 型に 65 人，B 型に 20 人，O 型に 21 人，AB 型に 5 人，合計 111 人 (18.8%) である（Table 9 の中に†印を付す）。これらの人びとがなぜ偽のブランドに引っかからないで，能見が作成した血液型性格，それも自分にうまく適合している血液型性格を選択したのかはわかっていない。わずか 18.8% の人数であるが興味がある。

Table 9　FBI 効果の実証

	A 型性格（実は O 型）	B 型性格（実は AB 型）	O 型性格（実は A 型）	AB 型性格（実は B 型）	人　数
A 型の人	115 (19.5)*	25 (4.2)	65 (11.0)†	22 (3.7)	227 (38.4)
B 型の人	11 (1.9)	79 (13.4)*	23 (3.9)	20 (3.4)†	133 (22.6)
O 型の人	21 (3.6)†	14 (2.4)	116 (19.7)*	21 (3.6)	172 (29.3)
AB 型の人	3 (0.5)	5 (0.9)†	6 (1.0)	43 (7.3)*	57 (9.7)

7.　血液型性格と心理学者たち

竹内久美子は，さきに“もしも心理学者のだれかが両者の間（注：血液型と性格）になにか関係があると思っているような素振りを見せたら即刻学界から永久追放されかねない。これは考えすぎかもしれない”と述べている。そのような虞は現代においてはないが，ポピュラーな心理学が遺した傷痕の疼きを感じないこともない。「心理学」のワールド全体が，心理学のポピュラライズ（注：佐藤達哉・渡邊芳之・尾見康博たちのいう「ポップな心理学」）に苦労しているといってもいいのかもしれない。この論文の最終章として，血液型性格問題に強く接触した心理学者（すべて故人）のプロフィールを素描しておこうと思う。

千葉胤成　千葉は 1942 年，満洲国の『建国大学研究院心理研究班報告』のなかに，「或る一族における血液型と気質との関係についての研究」を掲載している。千葉は血液型と性格との相関を論じていた学者で，彼は，研究に当たって被験者の質に留意しなければ良好な結果は得られないと記述している。

なお，千葉は ABO 式血液型 4 型について次のように解説している。「O 型と A 型とは両極に近く，これに接するものとして，一方に B 型，他方に皮肉屋をあげうべく，AB 型は中央に位置する，と見ることができる」[14] としている。これはわからない。「陰陽五行説」に拠っているのではないか。千葉は，1953 年から 1963 年まで大村と同じ心理学研究室にいた。しかし，大村が血液型性格問題に目覚めたのが 1982 年だったので，取り返しのつかない約 10 年の歳月を空費にしてしまった。惜しいことをしてしまったと思う。

石川七五三二（しめじ）　石川は 1928 年，「血液型心理学」ということばを用いている。彼は心理学上の知見をベースにして，A 型と O 型，O 型と B 型，B 型と AB 型，AB 型と A 型に，ある情意的特性が共通していると考える。そして，A 型と B 型，O 型と AB 型はそれぞれ最もかけ離れた関係にあるとする。この考え方を能見が「相性」という図式で利用している[15]。

岩井勝二郎　岩井は 1932 年 7 月，京都帝大の構内で開催された心理学読書会例会で，血液型性格についての調査をしている。彼は，古川竹二がまとめた気質調査表から ABO の記号を削除し，出席者に自分がどの群に相当しているかを判定させている。その結果，52 人中 35 人 (67.3%) が各自の血液型に関係なく A 型の項目を集めた群を選択したのである。このような事実は，血液型と気質との関係が判然としたものでないことを示すものである[16]。FBI 効果の源流である。

田中秀雄　東北帝国大学における千葉胤成の弟子である。卒業論文は血液型に関するもので，『気質分類及びその実験的研究』である。田中は，気質の判定は古川の自省表でも的確につかむことはできない，本質直観による判断が重要だと強調している。田中は，東宛書房が『生活と精神の科学叢書』を刊行したとき，その 13 巻に『個性の研究』(1936) を

[14] 千葉胤成 1972 無意識の心理学　協同出版，p. 94.

[15] 石川七五三二 1932 情意的特性から観た血液型の型的異同 (1)　個性研究，1-6, p. 336-339.

[16] 岩井勝二郎 1923 血液型と気質　応用心理研究，1-2, p. 176-181.

入れている。内容は血液型性格学である。田中はその生涯で数多くの職域で活動したが，1954年（49歳ごろ）に防衛大学校の教授になり，1964年，現職のまま病没している。現職中，防衛大学校の学生募集の2次試験のおりに「内田クレペリン精神検査」を実施し，合格・不合格の指標にしたいと述べて物議をかもし出したことがあったそうである。

8. 結　　語

この論文は，『応用心理学研究』の第33巻第1号に所載した論文「『血液型気質相間説』の史的評論」の続編のように思われるが，内実はそういうものではない。血液型と気質・性格を連関させ，問題についての“ものの見方・考え方”を記述し，多くの研究者たちが陥った問題点を指摘している。

「科学」とは何かという定義は判然としていないが，*nomothetic* な性格を持っていて，*idiographic* な性質を持っていないということだけは確かであろう。推測統計学的方法が導入されてから *nomothetic* な性格はますます強化され，新しい未成熟な結果が推計学的技法によって保証されている。そして，「血液型気質相関説」も可笑しな好事家によって古川竹二も驚くような変容を遂げてしまっている。その過去のものが能見正比古の血液型人間学であり，最近のものとしては『anan』などで活躍しているG・ダビデ研究所の血液型性格判断である。この研究所には，多くのクリエイティヴな若い心理学者が入っているらしい。24型にも及ぶ血液型，裏血液型，さらに血液型とDNAタイプ[17]との組合せによる性格判断など，枚挙にいとまがないほど科学の枠組みを超えたものを出してくる。われわれは，やがてこのような新しい人びとと対峙することになると思う。

主要参考文献

（引用文献は，各ページの脚注にあるので省略する）

長谷川芳典 2005 批判的思考のための「血液型性格判断」 研究紀要（岡山大学）43号 1-22.

松井　豊 1989 日本社会心理学会第30回大会ワークショップにおける資料.

溝口　元 1986 古川竹二と血液型気質相関説　生物科学 38-1.

永田良昭 2000 血液型性格関連説など通俗的人間観への関心の社会心理学的要因　心理学研究 71-5.

永田良昭 2005 血液型性格判断はなぜ受け入れられるのか　学士会会報 VI No. 855.

中島定彦 2007 プロ野球選手とJリーガーの血液型 JAPAN SKEPTICS News letter No. 61.

佐藤達哉 1993 血液型性格関連説についての検討　社会心理学研究 8-3.

佐藤達哉・尾見康博・渡邊芳之 1994 現代日本における2つの心理学　行政社会論集（福島大学行政社会学会）7-1.

佐藤達哉・渡邊芳之 1996 オール・ザット・血液型 (株)コスモの本.

（受稿：2007. 12. 14, 受理：2008. 3. 21）

[17] 2008年1月発行の『anan』10号に掲載されている。大村がそのテストに応じたところ「トロピカルDNA」とのことであった。このDNAの特徴は「優れた本能による直観的な行動が際立つ」という。当たっているような気がする。なお，この雑誌では，DNAをラテン系，アングロサクソン系，オリエンタル系およびトロピカル系に分けている。深読みしなければ笑話で終わることができよう。